

環境意識コミュニケーション研究所代表
やなせひろひで
柳瀬宏秀



環境意識 序説

環境意識とは何か？

環境意識とは？

考えたことがあるでしょうか？

まわりを感じることに。

「まわり＝環境 を、感じる＝意識する」
それが環境意識。

環境意識コミュニケーション研究所代表。カミュ、サルトル、ブルースト研究。青山学院大学大学院フランス文学専攻修士課程修了。その後20年間電通にて、コピーライター、CMプランナー、映像プロデューサー。環境、パラダイムシフトについて研究。7年前に退社し、現職。「時間をはずした日の祭り」を呼びかけ、その呼びかけに共感した多くのアーティスト達が、毎年、7月25日（時間をはずした日）に、地球の様々な場所で祭りを生み出している。「京都、満月祭り」「満月の十三祭り」企画プロデュース。「日本文化の心に触れる会」主宰。「コズミック・ダイアリー」著者。日本でのホゼ・アグエイアス博士の唯一の代理人として、マヤの叡智についてセミナーや講演も行う。著書『マヤの叡智と日本人の魂の融合』、監修・訳『マヤン・ファクター新版』、監修『2012年への進化 ホゼ・アグエイアス伝記』。『環境意識』執筆中、夏までに刊行予定。

【環境意識コミュニケーション研究所】
<http://www.async.ne.jp/cosmic>
TEL : 055-974-3901
FAX : 055-974-3877
cosmic-kin12@syd.odn.ne.jp

地球上の生命を育んでいる、太陽や月をまず、感じることに。

そして、大地を、地球上の自然を、草木を、昆虫を、動物を、山を、海を、そして、人を感じることに。それが、本当の環境意識。

人類の誕生は？ 生命の誕生は？

今、すべての生命が地球上で育まれている理由は？
火星で、金星で、月で、生命が育まれなくなった？
あるいは育まれていない理由は？

人類が、生命が、存在するために、何が必要か。あるいは、魂が、存在するために、何が必要か。

人類が環境意識を取り戻すことによって、自然が再生していく可能性があり、自然界が、循環していた状態に戻すことができる。そして、環境意識が、人を進化させる。という明確な直観がある。

第1章 環境意識を持つことによって

20世紀の終わりの頃、アースデーで時々講演をした。そのときに、一緒に講演する人たち、環境運動をやっている人や環境ビジネスの人。その人たちは、花も、月も感じていないような話し方をしていた。いつ満月かも知らず、花も感じない人が、つまり、環境意識のない人が、環境を語っている。左翼運動のパターン、企業活動のパターンで、環境が語られているように聴こえた。その時、形の違う、環境問題をこの人たちが、今までの環境問題と同じような

構造で、また起こすことになるのだろうか……と、人間のサガのようなものを感じて、なんだか虚しく、アースデーでの講演をその後やめてしまった。

バイオマス(※)のエネルギーは、環境にいい。環境対策の大きな柱として注目されていたし、今も重要な価値があると思っている。バイオマスのエネルギーは、環境に対してインパクトが少なく、生態系と調和のとれた利用が可能。大気中に放出される二酸化炭素量は、バイオマス育成時に光合成により固定される二酸化炭素により相殺されるので、バイオマスのエネルギーは地球規模での二酸化炭素のバランスを崩さない。CO₂バランスを壊さないクリーンなエネルギーである。ただし、それを開発し、発展させる人間が、まわりを感じるといって環境意識を持っていない場合である。

2008年に、様相が一変した。環境学者の間では、数年前から懸念されていたことなのだが、バイオマスの原料としてのとうもろこし栽培のためにアマゾンの森が破壊された。各国政府がガソリンに

数パーセントのバイオエタノールのオイルを入れることを義務付ける方向に動き、とうもろこしの高騰と食料の枯渇を生み出し、アフリカでのさらなる食糧危機が報じられた。一方で、カジノをつくってギャンブルを楽しむアメリカのとうもろこしバブル農家の出現をテレビが報じていた。

グローバル経済の中に、環境のためのバイオマスのエネルギーが繰り返されることによって、環境意識のない環境運動や、環境活動、環境政策とは、こんなものを生み出してしまおうということの実証である。

地球をひとつの生物圏として感じる、あるいは、「観じる」意識が欠如している限り、環境問題は解決できない。太陽や月を感じていない、いつ満月かも知らない、大地を、地球上の自然を、草木を、昆虫を、動物を、山を、海を、そして、人を感じていない人間に、環境破壊をとめることは無理なのだ。まず、心の深いところに刻むべきである。

人類が破壊している自然界の姿は、もし人類が絶滅していなくなったら、50年で地球はもとの自然に戻る、という科学的な研究結果が発表されている。

環境意識、まわりを感じる。「まわり」環境を、感じる「意識する」。この環境意識を人類が取り戻すことを、すべての環境が、(動植物が、地球が、太陽が、宇宙が、)要請しているのだ。そして、もっと正確に言うと、環境意識を人類が「取り戻す」のではなく、人類史上初めて、環境意識から宇宙意識へと進化する文明を生み出すことを、地球のすべての生命と、地球と、太陽と、宇宙が、望んでいるのだ。

第2章 環境とビジネス

20世紀には、環境はビジネスにはならない、といわれた。それは、右肩上がりの経済成長と、相容れないものだから……。

1998年、環境をテーマにした万博を、日本人は喜々として森をつぶして行おうとしていた。こ

※ バイオマス：一般的には「再生可能な、生物由来の有機性資源で化石資源を除いたもの」をさす。古紙・家畜排泄物・食品廃棄物・建設発生木材・製材工場残材・パルプ工場廃液・下水汚泥・尿汚泥などの廃棄物系、稲わら・麦わら・もみ殻・間伐材など未利用のもの、さとうきび・とうもろこし・なたねなどのエネルギー作物がある。

のままでは間違いなく万博自体がつぶれると確信し、当時勤めていた会社の副社長に、万博をつぶさないための13の提案をした。「このままでは万博がつぶれる」という結論に副社長は絶句して、博覧会協会に内緒で、代替地の視察に行く。柳瀬が地元のカメラマンに案内され、瞑想してきた海上の森の「主」のような木の場所を教えるようにと連絡があったりした。

その提案は「21世紀にどんな万博がふさわしいか、本気で考えて欲しい」という副社長の異例のオリエンテーションがきっかけだったのだが、その半年後に、「森問題について、広告代理店としては何も言えない……」と梯子をはずされたような形になり、博覧会協会には提案されなかった。そして、その数ヵ月後に、ヨーロッパにあるBIE（博覧会国際事務局）から、このままでは環境破壊以外の何ものでもないという理由で愛知万博の計画はすべて白紙に戻された。

いう報道が大きく流れ始めた。現実として、大きな変換をなさなければ、万博はつぶれる事態になった。BIEが、NOと言わなければ、日本ではジャーナリストでさえ、「森をつぶして、環境をテーマにした万博」に疑問を持たなかったのかもしれない。

考えてみませんか？

どうして、森をつぶして環境をテーマにした万博を、喜々として進めることができたのか？

どうして、ジャーナリストでさえ、その矛盾に気づかないように振る舞うことができたのか？

先述した、会社での、柳瀬がリーダーとなって「13の提案」をしたチームは、後に「千の風」を作曲した芥川賞作家の新井満さんや、直木賞作家の藤原伊織さんもいた。7人のチーム。その中にいた若い、新聞社とさまざまな仕事をしてきた頭のいい社員は「柳瀬さん、万博は産業振興のためのもので、環境は、お題目じゃないのですか？」と、環境というテーマに焦点をあてて真剣に取り組むことに違

●環境をテーマにした万博を どうして森をつぶして行おうとしたのか？

しし座流星群が接近し、日本人が流星群を楽しんだ1998年11月17日、マスメディアの会のシンポジウムで「森をつぶして、環境をテーマにした万博」というコミュニケーションが成立したら、間違いなく、この万博はつぶれる。ドイツやデンマークなど、ヨーロッパの環境先進国が参加できるわけがない」と、語った。21世紀最初の万博、しかも環境をテーマにした万博が、日本人の環境意識が低いという評価のもとにつぶれる。「それでいいのか？」というマスメディア、ジャーナリストへの問いかけの意味でそのシンポジウムの内容を企画したのだが、その時、ジャーナリストの反応は鈍かった。

そして、住宅建設など環境破壊を前提とした万博は認められないというBIE（博覧会国際事務局）の通達によって、初めて、マスメディアで、日本の（愛知県の、通産省の）姿勢がおかしいのでは、と

和感を覚えることを伝えてきた。

いまさら、万博の担当者や、ジャーナリストの問題を指摘しているのではなく、一言で言うなら、システムがそういうシステムだから。そういうシステムをつくり、受け入れ、その中で、生きていくから。「森をつぶすことと、環境というテーマとの矛盾」に気づかなくさせている構造に気づくべきときなのだ。では、そのシステムをつくったのは何なのか？

人々を無意識のうちに、自然との共生の価値を感じなくさせる何か。人工的なお金、効率という価値観の方向にだけ誘う何か……その何かを見極め、それを変えることができないうか。それが、環境問題解決のための真のテーマなのだ。

●環境問題の根本は、人が「木」の心をわからなくなったからだ

人間だけが植物や動物と違うリズムで生き始めたことによって、植物や動物の心がわからなくなり、人間だけの価値観で、知らず知らずに大きく自然を

破壊してしまったのだと感じる。もし、木と同じ自然のリズムで生き、「木」の痛みがわかったなら、森をつぶすことは簡単にはできない。「木」の痛みがわからないから、平気で環境をテーマにした万博で、森をつぶそうとする。

20世紀に、人が感じなくなったものを「感じる」ことが今、重要なのだ。草や木のリズムを感じる、花の美に宇宙の営みを感じる。虫の声に、知らせを感じる。月のリズムを感じる。宇宙のリズムを感じる。生命に共通のリズムを感じる。自然のリズムを、収穫によって感じる。その作物が、太陽や月や、大地や、虫や、微生物や、水のおかげで収穫できたこと、すべてがつながっていることを「感じる」。すべてがつながっているという「感謝」という感覚から「祭り」を行う。祭りというダイナミズムによって、人が、宇宙や、自然のリズムを心の深いところで「感じる」。そういうことが、社会のシステムを変え、そして、大きな意識変革のために必要なのだと考えた。

●環境意識コミュニケーションとは？

今、感じていない、まわりの、環境を感じる。それを感じるためのコミュニケーションを行うこと。つまり、環境意識を高めるコミュニケーション、それが、環境意識コミュニケーション。番組や、広告、報道、教育のすべてが根本の精神に戻ると、環境意識コミュニケーションになってくる。すべてのコミュニケーションを「今、感じていないものを伝える」という観点から見直すべきだ。

企業買収の話題の中で、メディアの公共性、という言葉が聞こえてきた。しかし、コミュニケーションの公共性とは、大衆の支持という言葉で紛れ込んだ視聴率主義、支持率主義とは、本来はまったく違う。公共性とは、人々の環境意識を高めるための環境意識コミュニケーションか、否か、究極すればそれだけにかかっている。

環境意識コミュニケーション研究所は、環境意識を高めるコミュニケーションだけを行う。それ以外の活動は一切しない。そういう意味を込めてつくった。それに専念するために、それ以外の活動を禁じるために、前の会社を辞めた。

「柳瀬さん、もう、あきまへんわ」。会社を辞めた後、親しかった社員が、熱海からトンネルを抜けて富士山の見える函南町かんなんまちの方の別荘地にある環境意識コミュニケーション研究所のオフィスまで訪ねてきてくれ、環境をテーマにした万博のキャッチコピーを教えてくれた。「人生、一度は、万博へ」

デイズニールランド以上に、人を動員したいというお金の事情しか、伝わってこない。環境をテーマにした万博であれば、そのポスターを見たら、そのコピーを読んだら、今まで感じていなかった、何かを感じ始める。環境意識が高まる、それが、環境意識コミュニケーションである。このコピーは、環境意識コミュニケーションの観点からは、ありえない。

●「働く」とは、「はた が、楽になる」ように、人が活動することだ。

ビジネスと環境を、二極化して考える、二元論。それを乗り越えるには、まず、利益追求が企業の目的だという大原則に、正面から疑問をぶつけることだ。

「働く」とは、「はた が、楽になる」ように、人が活動することだ。企業の活動の継続のために、社員のための生活のために、利益を生み出す工夫と努力を行う、つまり、働くのは、当然のことだが、利益追求が、企業の目的ではないことを感じなければ、企業も、国も、人類も、環境破壊を続けざるを得ない。

まず、何のために「食」を生産するのか？ 何のために「車」をつくるのか？ 何のために「伝える」のか？ どう「働く」、「はた が、楽になる」のかを、個人の目的、企業の目的として、深く認識しなければならぬ。企業の目的も、人のためになることであることを、今、忘れてしまっている。真の

目的がお題目になっては、いけない。

環境意識コミュニケーション研究所として、取り組んだのが、「満月の十三祭り」「京都、満月祭り」
「FEEL THE FUJI FESTIVAL」そして、リゾート・ホテルのコンサルティング。

満月がいつかも知らなくなった日本人。まず、月を感じることから、自然を感じる心を取り戻してもらうための「祭り」を生み出すことにした。

それが、「満月の十三祭り」「京都、満月祭り」という形で、賛同してくれたアーチスト、喜多郎、ウーアUA、スズキSUGIZO、ビーBIG IN、喜納喜納昌吉、鬼太鬼太鼓座、神崎神崎愛、河合河合隼雄、梅若梅若六郎、山口山口小夜子、宗次宗次郎、岡村岡村喬生、響道響道宴、朝崎朝崎郁恵、矢吹矢吹志帆、矢中矢中鷹光、ジョンジョン・チャヌ、ミネミネハハ……たちとともに、満月ごとに連続18回、芸能が生まれた原点としての祭りを、満月の夜に、生み出した。

●「京都、満月祭り」・「満月の十三祭り」の主旨は、

月の祭り。

月を感じる。

宇宙のリズムを感じる。

自然の摂理を感じる。

次の満月がいつか、知っていますか？

あなたの子供は、朝日が昇るのを見たことがありますか？（小中学生の23%が、生まれてから一度も、朝日も、夕日も見たことがない。2000年2月5日、朝日新聞 朝刊一面トップ記事）

祈りに近い思いをもって、呼びかけます。

満月に、祭りを。

月を感じることから、

日本人が、草木を感じ、虫を感じ、自然を感じ、まわりの人を感じるという

日本人本来の精神の営みが、蘇ることを。

宇宙に呼応する魂の胎動を、呼び起こすために、

満月に、祭りを。

プロデューサー 柳瀬宏秀

チラシや、ポスター、CM、番組で、このメッセージを流し、会場に來ない多くの人に伝え、祭りの会場では、次のコメントをアナウンスした。

●「京都、満月祭り」アナウンスコメント

本日は、主催 関西テレビ放送、京都チャンネル、京都、満月祭り」にご来場いただき誠にありがとうございます。でございます。

千年の伝統がここに始まる。京都、満月祭り。

千年の伝統を……というのは、この千年と同時に、

これからの千年を感じ、考える。

そんな、時と空間を越える「祭り」を、満月ごとに、京都の社寺、仏閣で、千年続けたい。

という願いが込められています。

この百年、日本人が忘れてしまった、

月を感じる。まわりのものを感じ、

「自然の摂理」を再び感じ始めること。

自然のリズムを生活の中に取り戻したい。

そのための呼びかけが、京都、満月祭りです。

本日が、千年の伝統がここに始まる、

京都、満月祭り の始まりの日です。

というメッセージを、会場で3回流し、伝えた。仁和寺、上賀茂神社、平安神宮で、このメッセージが流れ、祭りから生まれた音楽の原点に戻って、一流のアーチストが祭りを生み出した。京都という

1300年の歴史を感じる街で、満月祭りごとに、千年の時を超えて月を感じる日本人の魂を生み出すために。

●FEEL THE FUJI FESTIVAL ONLINE

富士山をきれいにする、とついでには、富士を感じる心を取り戻すこと。だから、「FEEL THE FUJI」

FEEL THE FUJI FESTIVAL

——富士山を感じる心を取り戻す「祭り」——
アナウンスコメント

富士山をきれいにする、とついでには、

富士を感じる心を取り戻すこと。FEEL THE FUJI。とついで、富士山、霊峰富士、ゴミを捨てることのできるのではありませんか？

富士山を感じる心を取り戻せば、ゴミを富士山に捨てることはできないはず。

未来の子供たちへの富士山という自然そのものの継承。富士山を愛する人たちの思いの結集。

そのひとつひとつが、FEEL THE FUJI「富士山を感じる心」から生まれると信じます。

■
なお、本日、7月25日は、時間をはずした日。

時間をはずした日の祭りとして、日本で1000、世界中で10000近くの祭りが、生み出されています。

FEEL THE FUJI 富士を感じる心を取り戻すこの「祭り」は、世界中に、発信されています。

■
富士に思いを込め、地球に思いを込め、FEEL THE FUJI「富士山を感じる心」を取り戻す

祭りを始めたいと思います。

●今日は、二十二夜。

熱海にあるリゾートホテルの各客室のベッドの上に置かれている、ある日のメッセージです。

毎日、月が変わります。メッセージの内容も変わります。

今日は、二十二夜。

月の満ち欠けの周期は、二十九、五日です。

新月から数えて、二十二夜目。

満月、十五夜から七日目の月。

今夜は、月の出が午後十時頃です。

日没が月の出だった、満月の日から、毎日、少しずつ、月の出が遅くなっていきます。少しずつ月が欠けて、明後日は下弦の月。半月。

月の出と、月の満ち欠けを楽しんで、暮らしていた。そんな日本人のころを取り戻す旅を。

ロイヤルウィングでの月の癒しのおもてなしは、月を、熱海のもつ、自然のエネルギーを感じていただくことから、始まります。

ロイヤルウィングは、日本で月が一番きれいに見える、ホテルです。リゾートから、月とともに、自然のリズムが蘇り、生活のなかに、昨日までとは違う、新しい時間が始まることを願います。

プロデューサー 柳瀬 宏秀

万葉集の時代から、日本人は月に思いを込め、歌に詠み込んでいました。今宵も、千人の宿泊客が、月を眺めて、日本の魂を取り戻すことを願います。

すべての分野に、環境意識を高めるメッセージを送り続けたいと思う。

次の文は、環境建築の雑誌に書いたものです。

●風通しのよい家

住まいって、住むって、どういうことなのか？
という問い直しが必要なのだと思う。

縁側って、今の子供たちは知っているのだろうか？

子供に聞いてみたら、

「それトトロの中で、おはぎを食べていたところでしょう？」という答えが返ってきた。

縁側の記憶をたどってみませんか？

縁側に座って、お茶を飲む。スイカを食べる。

目の前には庭がある。

花が咲く。実がなる。草木の変化がある。

夏の夜には線香花火。

子供たちが遊んでいる。満月に、月見酒。
子供はだんごをほおぼる。

隣のおばさんが長話しに来る。

夏の昼寝、風が涼しくふれてゆく。

40代以上の日本人にとって、居心地のいい記憶がよみがえるはず。

それは隣の家との、子供たちとの交流の場であり、四季を楽しむというより、自然の中で暮らすのに近い、宇宙と接する場であった。

縁側に座って、お茶を飲む。庭のある空間でお茶を楽しむガーデンの源が、ここにある。

お茶がアールグレイに変わり、草木の造作が少し変わったが、イギリス人があこがれ、今やガーデングとして逆輸入されている日本の文化は、縁側という「場」が、生み出したのだ。

人と人との風通し

家の中に入ると、それでも、風通しの悪い家は嫌わ

れた。

冬は、家族がひとつの炬燵こたつを囲んで、火鉢でお餅やお煎餅を焼いた。そこで、みんなでお茶を飲んだ。

風通しは、家族関係の風通しと同義語だ。

子供に鍵がかかる個室を持たせるという行為が、愚挙だということにそろそろ気がつかなければ。気づくということは、そのシステムを、その設計を、その意識を見直すということ。

人と人との風通し。それは、日本の住まいが育んでいた、親と子との、夫婦間の、近所の人との、風通し。フライバシーという言葉で、そのすべてを台無しにしてきた。

風通しがいい、ということとは、人の気配を感じるこ
とができるということ。

子供の声から、足音から、子供の状態を知るのが、日本人の母の役目だった。

自分の子供の足音の特徴さえ、知らない親がいる。

近所の人から、自分の子供のことを聞いたことがあ
りますか？

人の目から見た、子供の姿。そんな客観的な回路を
失っていませんか？

「うちの子に限って、そんな……」

どうして、そんな間の抜けた言葉をすべての親が、
口にするようになったのか？

それを「住まい」「家」という観点から、見直して
みませんか？

風通しの悪い家には、ダニが増える。カビが繁殖する。
みんなあたりまえのこととして、知っていたはず。

そして、ペットボトルの中に入れたアリに、煙を吹
き込むように、化学物質が充満した家をシックハウ
スというらしい。

化学物質を使ったから、高気密だから、シックハウ
スなのでしょうか？

人と人の風通し、人と宇宙との風通しを「感じない」不感症の建築家が建て、住む人も、「風通し」に不感症になったから、シックハウスが生まれたのでは？

「風通し」から「見通し」へ

月が見える家がいい。朝日夕日が見える家がいい。家から見えなくても、庭から、あるいは、隣の家のベランダから、少し離れた高台から、夕日が見える。そんな住まいかたがいい。

家の中の風通しは、外に出たら見晴らしになり、それは見通しになる。

とうとう、子供の四人に一人が、朝日も夕日も生まれてから一度も見ることがない。

(朝日新聞朝刊のトップ記事)と答えるらうじや。

次の満月が、いつか知らない親や教師達。

シックハウスは、家だけの問題ではない。

と思う。

このまわりを感じるという環境意識にまで、立ち戻らなくては、環境建築という言葉に、命を吹き込むことはできないだろう。(引用終わり)

20世紀には、環境はビジネスにはならない、といわれた。でも、環境意識を高めるコミュニケーションとして取り組んで、コンサルティングしたホテルは、最初の一ヵ月で、前年比170%の売り上げを上げた。リゾートの意味を見直し、イタリアンレストランに月のメニュー、バイオダイナミクスワインを取り寄せ、日本食も月をテーマに、バーに月のカクテル、月の装飾、月のエステティシャン、すべてを「月」をテーマにもてなした。月を感じることから、自然のリズムを取り戻す、都会で失った、日本人が失った自然のリズムを取り戻すことが(つまり、環境意識を取り戻すことが)、これからのリゾートに都会の人が求めているものだ。人が、まだ

シックスクールといって、化学物質過敏症によって、登校できない子供が5万人いるとも推測されている。

「環境」という意味をとらえ直しませんか？

環境とは、まわりのもの、まわりの人、まわりの草木、林、森、山、川、大地、地球、そして、月、太陽、星、宇宙のこと。

言葉通り、まわりのもの、「環境」を感じてみませんか？ まわりのものを意識してみませんか？

それが、「環境意識」。まわりのものを「感じる」意識するとうことだ。

「風通し」という言葉には、「縁側」の居心地には、環境意識がある。

つまり、まわりを感じるとうこと、孤立して生きているのではなく、すべてがつながっているとうこと、人という生命が存在するための基本的な認識がある

気がついていないリゾートの本当の意味を語り、月を感じることから、次の日から仕事のやり方を変えるほどのもてなし方をアドヴァイスした。

コンシエルジュ、フロント、エステ、シェフ、ソムリエ、ウェイター、営業、従業員を集めてもらい、「月のレクチャー」をして、今日は、十六夜いざよひ、立待月、居待ち月、寝待月、満月の意味、月見の文化など、月を楽しむことをまず、もてなす側が楽しみ、お客さんに伝えるようにした。

最初のレクチャーの次の満月の日に、イルカが50頭、ホテルの前の熱海の海岸にやってきた。それ以前も、それ以降も、そんなことはないそうだ。イルカに祝福されたキャンペーンだったのだと思う。環境意識コミュニケーション。このひとつのホテルから、環境意識がひとつ育つ、環境意識を取り戻す宿泊客がまたひとり生まれる。ぜひ、日本中の、いや、世界中のリゾートホテルで、自然を感じることを意味を伝えて、おもてなしをする。そんなキャンペーンを、人の意識を変える、環境意識コミュニケーション

ンとして行ってほしい。人のため、地球のために働けば、その見返りが戻ってくる。イルカも、祝福に来る。

しかし、相変わらず世の中は、環境の方にシフトするのではなく、環境をビジネスの方にシフトさせた。先ほど話した、バイオマスのエネルギーの生み出した矛盾、それだけでなく、すべてが目先のお金のためにおかしくなっている。報道への尊敬を、報道ために得られた情報でインサイダー的な株儲けをする社員をNHKが雇っていることで、地に落とされた。日本食の文化への敬意を、目先のお金のための偽装工作で伝統とのれんの意味を失墜させた老舗の日本料理店。人のために働く公僕のはずなのに、「わからなければ」と、人の年金を懐ふところに入れた役所の多くの職員。何を感じながら、何を目的に生きているのか？

すべて、まわりを感じない、「要は、お金でしょ」という、システム。そのシステムの中で、お金と効

率だけがのさばって、目的が消えてしまった。売り上げさえ上げていけば、というシステムの中で、システム以上のものを感じなくなったから生まれてしまった環境破壊と同じ構図、構造だ。

もし、目的がお金だというなら、そのお金で何をすることが目的なのか？ しつかりと考え、明確にすることが、実は、環境意識につながるかもしれない。「働く」とは、「はた が、楽になる」ように、人が活動することだ。ということとすり合わせてみてほしい。

今、チャレンジすることは、環境推進派として進んだ方向性と、経済主導で躍進を遂げた環境技術とが、その方法が両極化したように思えたものが、地球という惑星の中で、陰陽のエネルギーのように安定した力となつて、新しい風を吹かすということ。その根本を支えるのは、人間の意識のあり方による。まわりのものを「感じる」「意識」するか、しないか、そのどちらなのかということ。つまり、環境意識を

持っているか、いないか、そこから、すべての違い

が生まれる。地球環境は、人類が自然に協力し、「ともに」CO₂機能する「operation」すなわち「協力」ということばの語源の状態。その本来の姿に戻ることを求めている。

一方で、目的だと思っていたお金を支える金融システムが崩壊しようとしている。人類だけの、あるいは、一部の先進国の価値観が、崩壊の危機に瀕している。

しかし、宇宙から見れば、環境のためのバイオマス・エネルギーで、森を破壊し、食糧危機を生む、そんなことを加速する金融システムなど崩壊した方が自然の道徳に即している。それが、宇宙の意志だと感じているのではないだろうか？ お金が目的、経済の右肩上がりだけが幸福の指標と考え、お金のために地球環境を破壊し、お金のために報道の価値や日本の文化を、貶おとしめた。

そして、公僕が盗人になるような、「目的がお金」という意識が支えてきた金融システムは、崩壊する。

そのとき、何が残るのか？

「働く」とは、「はた が、楽になる」ように、人が活動すること。という本質に戻れば、いい。

まず、まわりのもの、「環境」を感じるという、生命として、人として、普通の環境意識を取り戻せばいい。

第3章 カレンダーと環境

「カレンダーと環境、カレンダーと社会、カレンダーと人」というテーマで、4年前に河合隼雄さんと公開の対談をした。カレンダーが、環境意識を高めたり、逆に環境意識を喪失させたりすることに、日本人は気づいていない。カレンダーが、自然を感じやすくしたり、感じなくさせたりすることを考えることがありますか？

●「コスミック・ダイアリー」を使うとどうして生理不順が治るのか？

マヤの叡智を基にした28日周期の『コスミック・ダイアリー』を初めて出版した時に、信じられないくらい多くの人から「生理不順が治った」という電話をいただいた。

宇宙に28日のリズムがあつて、そのリズムの中で、細胞、遺伝子が育まれたとしたら、28日という周期は、イコールからだのリズム。31日、28日、31日、30日……というガタガタの今のカレンダーを使うことによって、女性の生体のリズムを狂わせるようにイメージトレーニングしているのに気づく。カレンダーは、プログラミング装置なのだ。細胞や遺伝子は、28日周期をまだ保っている。宇宙のリズムも身体のリズムも28日なのに、頭の中だけまったく違うリズムで生きているとしたら、自律神経がおかしくなってくるのが当然だ。「生理不順の改善」を女性が生体のリズムを取り戻した一つの証拠だと考える

と、社会全体が自然のリズムを取り戻すという、次のステップへの想像力をかきたてる。

●本当のカレンダーとは？

太陰暦は、日本人に月を通して、環境意識を確立させた。ただ、満月の周期29・5日は、12カ月で354日。一年の周期、季節と10日以上もずれてしまう。

カレンダーは、共振の場を作る。自然に合ったカレンダーであれば、その自然との共振の場をつくる。自然時間のカレンダーが環境意識を育む。カレンダーとは、それを使うと宇宙の摂理がわかり、それを使うと、心もからだも健康になる。それが本当のカレンダーなのだ。

第4章 環境意識の宇宙的展開

環境意識を持つということは、地球を感じるとい

うこと。地球上のすべての人類を感じる。すべての生命を感じるということ。環境意識は、ガイアをガイアとして感じる、生命として地球を感じる。そういう惑星意識というものも、意味しているのだ。そして、環境意識は、太陽の恩恵を「感じ」、月を「感じ」、星を「感じ」、惑星軌道や周期を「感じ」、銀河を感じ、宇宙の摂理、自然の因果応報を「観じる」という、宇宙意識を持つということにならざるを得ない。

「感じる」と「知る」は違うのだ。環境意識がまわりを感じることであれば、その感じる対象が自然であれば、それは太陽系の動きとつながっており、さらに銀河の動きとつながっている。そこまで感じることによって、人間は環境意識によって完全な叡智を身につけるところにまで近づく。

日本人が環境意識を高め、人類に広く共有していく活動を進めれば、人類の意志によって、地球全体が、その有機的な秩序が、生命を永遠に生み出す星

として息づくことだろう。もちろん、その活動が環境問題の解決ももたらす。

人類にとつての環境意識で一番大事なのは、太陽を意識すること、太陽を感じることである。今や、日の出を生まれてから一度も見ることがない子供が、50%を超えている。

太陽の意志から、宇宙の意志、摂理、法則を実感することが、今、一番肝要。

人類が、太陽の意志を感じ、そのエネルギーを人間の中で活性化することによって、人の持つエネルギーと、地球の持つエネルギーと、太陽のエネルギーが、共振し始める。それが、循環型社会といわれるものの目指す正確な方向である。

第5章 人間は、環境意識によって、完全な叡智を身につける

夏は暑い、暑いのはどうしてか？ と聞くと、夏だから……としか、答えられない。

そういう無明から、環境意識は、因果の理由を知ることによって、悟りを導いていく。簡単にいうと、地球が太陽の周りを大航海する公転により、日本の四季がおとずれれることを「知る」だけでなく、「観じる」ようになる。

まわりを感じる、環境意識は、まわりを広げることにより、宇宙意識となり、まわりの因果、変転の法則を感じるにより、心という、高次元への通路を超えていける。

今、人類は何をするべきなのか？

心の中に、純粹にあるもの。本来の自分。自己。意識。というのは、どこからきたものなのか？

「オーガニック・オーダー（有機的秩序）」がわかれば、宇宙の周期が時間とわかれば、そのリズム、周期、そういうものから、遺伝子が、細胞が生成されてきたのを観じる。そして、生命が育まれ、地球に生命があふれ、地球自体がひとつの生命体、ガイアなのであれば、その宇宙のリズムの中に、宇宙の

環境意識は、人間中心の意識から変容し、進化していく。宇宙的なビジョンという発想から考えなくしては、目先の利益のために大局を失うのと同じく、地球環境と良いながら、宇宙的に見る、普遍化された視野を指さなければ、実際の地球を感じていることにならないし、地球環境の解決はできない。

そういう真理に向かうか、「無明」のまま、つまり、宇宙の摂理を知ろうとせずに、井の中の蛙かのままであるかは、自由意志に任されているとわかっていい。

一人が智慧を持って、人類としては、意味がない。人類全体が智慧を持つために、お互いに影響を与えて、感化しあうことが重要。それが、環境意識を高めるコミュニケーション。そのために、献身することが、オーガニック・オーダーの最高の結晶状態としての水晶のように、地球と人類を輝かせることができる。環境意識コミュニケーションとは、そのためのコミュニケーションである。

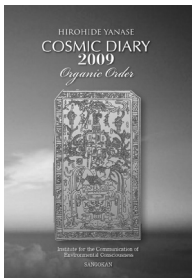


意志を感じてもおかしくない。それが、生命を生み、緑の地球を生み出し、維持しているなら、われわれの意識は、本来は宇宙意識だと考えた方が無難な科学的な見解だといえる。

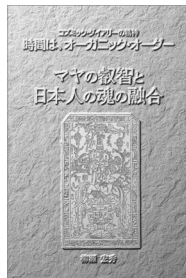
なぜなら、本来、生命は、すべて宇宙のリズム、周波数、意志、から生まれたものであるから、本来の自己存在は、宇宙意識そのものだから……。

第6章 環境意識は、悟りを導く

地球環境を考えると、オーガニック・オーダーという言葉が、浮き上がって見えてくる。地球は、地球上のすべての生命が有機的につながって存在し、依存しあっている。さらに、太陽の光と熱とエネルギーによって、この地球の環境、生命の営みが生まれ、月との関係、他の惑星との関係も含めて、目に見える大きな影響から、目に見えない影響まで、すべてがつながって、影響を与え合い、オーガニック・オーダーとして存在している。



『コズミック・ダイアリー 2009年』
2008.7.26 ~ 2009.7.24
2800円(税込)
●ザ・フナイ読者は、2000円



『マヤの叡智と日本人の魂の融合』
2000円(税込)
●ザ・フナイ読者 送料無料

お申し込みは、メール、あるいはFAXで。
mail: cosmic-kin12@syd.odn.ne.jp FAX: 055-974-3877
お名前、ご住所、お電話番号に、「ザ・フナイ読者」とお書きください。